

# ミステリ読書案内

2022. 8. 15 発行元

第386号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 船のミステリ日本編

第381号で「海外編」を取り上げた。今回は日本編。日本は島国であり、四方を海で囲まれているので、船に関するミステリは多いように感じる。地球の未来に取っても「海」は重要な要素となるだろう。

### 船の旅行はまだ先か…

新型コロナウイルスの影響がずっと続いており、世の中の人々の気持ちは「安心して旅行」の状態にはまだ遠い気がする。特に長期間、閉じ込められた空間になる「クルーズ船」は厳しいのではないだろうか。国内中心の短期間のもものは企画されているようだけれども…。下には内田康夫と木谷恭介の世界一周クルーズを取り上げてみた。

今回は日本ミステリの船を題材にしたものを取り上げる。トラベルミステリの大御所・西村京太郎はスタート直後、船や海をテーマにした

ものが多かった。『赤い帆船』『消えた乗組員』『伊豆七島殺人事件』『原子力船むつ消失事件』『伊豆の海に消えた女』…。鉄道だけが西村京太郎ミステリの世界ではない。

多島斗志之も海を舞台にした冒険小説の作品が多い作家で、『海賊モア船長の遍歴』『海賊モア船長の憂鬱』『不思議島』『金塊船消ゆ』など質の高い本が並ぶ。

他にもボートで行き来する有栖川有栖の『孤島パズル』など、船のミステリはたくさん読んだような…。佐々木譲『エトロフ発緊急電』、山本巧次『軍艦探偵』、吉川英梨『新東京水上警察』…。

### 西村京太郎「消えたタンカー」

1975年カッパノベルス。初期の十津川警部ものだが、その後のトラベルミステリとは少し雰囲気が違う。

インド洋で巨大タンカー第一日本丸が突然炎上。船長含め6名が近くにいた漁船に救助される。残り26名の船員の生死と船のその後は不明のまま情報が途絶えてしまう。インド洋の真ん中なのでやがて捜索活動停止。そして、日本に戻った宮本船長が散歩中に崖下に転落死したことが、十津川警部補が乗り出すきっかけとなる。十津川の元に「タンカー生存者を皆殺しにする」との脅迫状が届き、そこから連続殺人が展開されていく。謎を追っていくと、沖縄、そして海外へと話はどんどん広がっていく。さて、消えたタンカーのその後はどうなったのか…。

### 内田康夫「貴賓室の怪人「飛鳥」編」

2003年角川文庫。名探偵・浅見光彦が豪華客船・飛鳥に乗って世界一周旅行に。『旅と歴史』の藤田編集長からの取材依頼による。なんと同乗者には内田康夫夫妻、警視庁捜査一課の岡部警視も。横浜港を出港し香港に向かう。浅見の元に「貴賓室の怪人に気をつけろ」との謎の手紙が届く。乗客の中に不穏な動きが…。そして殺人事件が発生する。香港で行方不明になっていた人物が船内に設置されている遺体安置ケースに冷たくなって納まっていた。実際の取材を元にしてるので「飛鳥」船内の状況が非常に詳しく丁寧に説明されているのが特徴。

### 木谷恭介「世界一周クルーズ殺人事件」

2001年角川春樹事務所。ノベルスではなく、木谷にしては珍しい単行本書下ろし。京都博物館から平安時代の仏師・定朝作と言われる阿弥陀如来立像が盗まれた。犯人の目星はついてはいるのだが証拠がない。事件の捜査を依頼された警視庁広域捜査室の宮之原警部は、海外に持ち出される途中を押さえようと世界一周のクルーズ船やまると丸に乗り込むことになった。東京・晴海ふ頭から出発し、シンガポール、スエズ運河を経由してヨーロッパへ。船内では3つの殺人事件が発生し…。宮之原警部ものとしては海外に話が広がるスケールの大きなミステリ。

### 多島斗志之「海上タクシー〈ガル3号〉備忘録」

1996年双葉社。雑誌『小説推理』に連載した7編を集めた連作短編集。姉妹編になっている長編の『二島縁起』については既にこの『ミステリ読書案内』218号で取り上げて紹介している。(本書の第三話と第四話の間に『二島縁起』の話があったらいい)

「ガル3号」。全長12m、定員34名。タクシーよりは大きく乗り合いバスの雰囲気。今治港を拠点にして瀬戸内海を走り回る。船長は寺田で、助手は数か月前に雇った若い女性の弓。「海上タクシー」というのは、定期航路がない島々を依頼によって送り迎えする船のこと。本書では7つの特殊な依頼について取り上げている。第三話の『見えないロープ』では刑事の依頼で同業者のアリバイ崩しに挑戦する。16ノット以上を出さずに1時間以内に尾道までたどり着くことができるのか。地元の家を知り尽くした者どおしの知恵と技術の競い合い。瀬戸内海も島も現実のものに合わせてあるので細部にわたってリアルに描かれている。第四話の『謎々』は寺田と弓が暗号解読に取り組む話。多島は物語作りがとっても上手だ。